2004.3.31.

うら谷津再生10年プラン・素案

1．再生プランの時期別枠組み

準備期	準備	2004年	準備委員会として再生プラン原案作成　体制つくり
第1期	始動	05～07年	再生プランに基づく本格的活動の開始
第2期	展開	08～10年	再生活動の全面的展開
第3期	定着	11～13年	再生活動の社会的、経営的、制度的な定着と確立

2．再生プラン作成のあり方－－－市民参加のプラン作りと適切な見直し

・プラン作りはうら谷津再生の意思をもつ幅広い市民の参加のなかで進めます
・プラン作りには専門家の協力を求めます
・再生プランは詳細な将来計画をあらかじめ確定させるというやり方ではなく、大まかな方向を定めつつ、取り組みの進展の中で順次、計画を充実させ、また、見直していく「段階的計画作り」の考え方で進めます
・各期毎に実施計画を立て、期毎に点検と見直しをします

3．再生プランの基本的考え方

・うら谷津地区のこれまでの歴史的経緯を尊重します
・うら谷津地区を一つの生態系セットとして捉え、個々の保全整備と利用再建計画をそこに位置づけます
・うら谷津地区の農地耕作の再建と自然保全の両立を大切にします
・全体的保全整備計画と多様性のある個々の利用再建計画の共存を大切にします
・利用再建計画は、それを担おうとする人々の主導性と責任で進めます
・多様性のある利用計画が提案し実行できる仕組みをつくります
・保全整備も利用再建もできるだけ手作り主義で進め、地域内資源の充実を図ります
・地権者の意思、地元住民の意思を尊重し、また活動推進メンバーのやりがい感の保証も大切にします
・地域コミュニティーの活性化を大切な計画目標として位置づけます

4．再生プランの領域

再生プランの領域をとりあえず次のように想定します
・生態系の保全、生物多様性の保全　生物調査の継続実施
・散歩道の整備　案内看板等の設置
・用排水路の整備　水源開発
・谷津田と畑耕作の再建　最終的には1～2ヘクタール程度の耕作再建
・周辺林地の整備　間伐等の推進
・谷津田ビオトープの整備
・経済事業活動の開発　農産加工、直売店、グリーンツーリズム等の検討
・活動施設の建設、整備　　うら谷津作業小屋、ベンチ、野外教室などの建設

うら谷津シンポジウム 2009

はじめのことば

2004年2月にスタートしたうら谷津再生活動は7年目を迎えました。活動のはじめにおおよその計画として「うら谷津再生10年プラン」を策定しました。その時は10年計画はかなり先までの長期計画だと受け止めていましたが、すでに3分の2の年月が経過しており、時の流れの早さを感じます。再生活動の進み具合としては、うら谷津再生はおおよそ実現してきたと考えて良いと思います。10年プランに則して言えば「展開」期から「定着」期にさしかかったところでしょう。当初の計画よりも1年ほど早く進んでいます。

飯野さん、大久保さん、神達さん、神田さんほか地元の地権者のみなさん、佐野さん、林さん、岡根さん、沼田さん、栗原さん、斉藤さんほか地元市民のみなさん、そして何よりも茨城大学のおおぜいの学生諸君の手を携えた活動の6年、そしてそこで作られた人の輪が、捨てられたままになっていたうら谷津を再生させてきたのです。たいしたものだと思います。

今日のシンポジウムでは、まずうら谷津再生を支えてきたこうした人の輪についてしっかりと噛みしめ、その意味を考え合いたいと思います。また「展開」から「定着」に進む再生活動の具体的あり方についてもうら谷津の人の輪を踏まえて考え合えればと思います。

さて、私たちのうら谷津再生の特質はどこにあるのでしょうか。

私たちの活動は、事前に立てた計画にそって進めたというのではなく、うら谷津と対話しながら、一歩ずつ、行きつ戻りつしながら取り組まれてきました。少しずつの農の取り組みとみんなでの食の楽しさが、徐々にうら谷津の自然を引き出し、うら谷津の農と自然とそこに集う人々の心が一つになって、捨てられていたうら谷津は、農と自然が息づくうら谷津として再生されてきました。その姿は、静かでたおやかな佇まいとして、うら谷津らしい風景として私たちの前に広がっています。

野良仕事をした後に、森から杉っ葉と枯れ枝を拾い集め、かまどに火を入れて、羽釜でご飯を炊き、手作りの味噌で味噌汁をつくり、みんなで美味しく食べる。お米や野菜はうら谷津で穫れたもの。いまでは当たり前になったこんな活動のあり方にうら谷津再生活動の味わいが示されているように思います。うら谷津でも大きな活動は「行事」として取り組んできましたが、うら谷津の行事の進め方には、いつも何気ない自然さへの志向が働いて来たように思います。こうした活動の心持ちの継続が、うら谷津のたおやかな佇まいを作り出してきたのだと思います。

いまたくさんの方々がうら谷津に来てくれています。散歩などでうら谷津を歩く人も増えています。学校の子供たちも大勢うら谷津にやってきています。これらの方々はきっとみんな、うら谷津のそうした雰囲気を好いものとして感じ取っているのだと思います。

阿見町にはたくさんの谷津田と平地林がありますが、こんな落ち着いた佇まいの谷津田はきっとうら谷津だけでしょう。

今日のシンポジウムではうら谷津再生活動のこうした特質についても深められたらと思います。

実穀小学校、霞ヶ浦聾学校、そして阿見小学校の子供たちの継続的な参加もうら谷津再生の大切な内容となっています。甦ったうら谷津で、子供たちが農

業を体験し、蘇りつつある昔の自然を体験しています。しっかりと仕事をし、楽しく野良を駆け回り、そして野の食事を美味しく食べる。そして何よりも地元のお年寄りのお話を聞き、野良仕事やワラ仕事の手ほどきを受ける。子供たちはそのなかでしっかりと育ってきています。そこに学校も、父母たちも参加してきています。すばらしい野良の教育になっていると思います。このことの意味についても今日のシンポジウムで考えあえればと思います。

昨年の出来事としては9月30日にうら太郎を事故で亡くしてしまったことが悔やまれます。うら谷津の森で眠るうら太郎の冥福を改めて祈りたいと思います。

2010年3月27日
うら谷津再生委員会副代表　茨城大学農学部教授　中島　紀一

うら谷津シンポジウム 2008

はじめのことば

早いものでうら谷津再生活動が開始されて5年が経過しました。

その間、たくさんの学生諸君がこの活動に参加し、たくさんの体験をし、学び、成長していきました。また、市民農園の方々をはじめとして地元市民のみなさんの活動参加も広がり、深まってきました。実穀小学校や霞ヶ浦聾学校のみなさんの学校行事としてのうら谷津参画も楽しく定着してきました。さらに、うら谷津再生の諸行事には、たくさんの方々のご参加を得てうら谷津を人々が集う場へとして育てていくことができました。

こうしたなかで、うら谷津再生は着実に進み、深化し、そこにはおだやかな農の営みと田舎の自然が甦りつつあります。田んぼも稲も甦り、畑利用もうら谷津らしい姿が見えてきました。うら太郎も元気に育ちました。やまの利用再建についての取り組みはこれからという段階ですが、それなりの道は見えてきていると思います。なによりも四季折々に、うら谷津の風景とうら谷津の時間が作られてきたことはすばらしい成果だと思います。

そして、地元農家のみなさん、うら谷津地権者のみなさん、さらには上長地区の住民のみなさんにおかれましても、うら谷津再生活動を認知し、それを良いこと、好ましいこととして受け止めていただけるようになってきたと思います。

地元の農家のみなさんについては、代表の飯野良治さんはもちろんですが、長老の大久保正義さん、うら谷津在住の神達千代子さん、田んぼの水利や結いの家つくりでご指導頂いてきた神田勝三郎さん、林地再生等でご協力いただいている大久保庄二さん、飯野文子さん、広場の土地を提供いただいている横張清彦さんほかのみなさまにはさまざまな場面でご指導、ご協力をいただくことができました。

スタートにあたって設定した「うら谷津再生10年プラン」では、準備期04年、始動期05年～07年、展開期08年～10期、定着期11年～13年と想定していました。関係のみなさんの楽しいご努力で、活動は当初の想定よりも1～2年ほど早く展開し、現在は展開期から定着期に移行する段階まできているように思います。これまでの活動をさらに広げ、深めつつ、うら谷津再生を地域の営みとして定着させていくこと、これがこれからの私たちの課題だろうと思います。今日のシンポジウムを期として、うら谷津再生活動の地域定着がさまざまな形で進められることを期待したいと思います。

昨年のシンポジウムでは、うら谷津再生活動から見えてきた、「うら谷津再生の作法と考え方」「うら谷津再生の思想」について提起させていただきました。それらを再確認しつつ、再生活動の地域定着に本格的に踏み出していければと考えているところです。

2008年12月23日

うら谷津再生委員会副代表　茨城大学農学部教授　中島　紀一

うら谷津シンポジウム 2007

はじめのことば

飯野良治さんからうら谷津再生についてお誘いをいただいてから 4 年が過ぎました。再生委員会に集う学生、市民、そして地元の方々の、ゆっくりとした、しかし途絶えることのない、楽しい働きかけの積み重ねの中から、うら谷津が少しずつ動きだし「甦るうら谷津」の姿がおぼろげですが見えてきたように思います。

うら谷津が甦り、人々が甦り、そして地域が甦る。うら谷津再生活動の積み重ねのなかから、この 3 つの「甦り」が、結び合い、交じり合いながら、うら谷津の新しい姿が少しずつですが見えるようになってきました。昨年のこのシンポジウムでは、うら谷津再生 10 年プランはおおよそ第Ⅰ期（準備試行期）を終え、第Ⅱ期（本格展開期）に移るところまで来ていると位置付けてみました。この一年を振り返って、こうした位置付けが現実となりつつあることが実感されます。

3 年目に取り組んだ行事のなかから「春は菜の花　野点会」「夏は楽しく　子供会」「秋は赤米　花見会」「冬は美味しく　味噌仕込み会」の 4 つを選んで「うら谷津年中行事」としました。今年は、これらの年中行事を、それぞれに、味わい深く取り組むことができました。今日のシンポジウムでは「うら谷津味噌」の美味しい味噌汁を楽しむことができました。

うら太郎も間もなく 2 歳の誕生日を迎え、うら谷津らしい牛格を備えるようになりました。うら谷津の自然と結び合う農の営みも、だんだん姿が見えてきたように思います。シイタケやナメコの大収穫も、うら谷津の恵みを実感させてくれました。

実穀小学校、霞ヶ浦聾学校との交流もたいへん充実した展開となりました。うら谷津を駆け回り、農作業に汗する子どもたちを真ん中にして、学校も、先生方も、地域のみなさんも、父母のみなさんも、そして学生たちも、それぞれに新しい何かを感じてこられたことと思います。こうした取り組みの積み重ねの中から、新しい地域社会は作られていくのでしょう。

今年の夏も、「まい・あみ祭り」の盆踊りに学生たちを加えていただき、楽しい一夜を過ごすことができました。その元気で楽しげな踊りの輪に、町長から特別賞が贈られたのも嬉しい出来事でした。秋になって、茨城大学の鍬耕祭も「うら谷津・上長」グループの参画で大いに盛り上がりました。上長集落のみなさん、あみ自然再生ネットワークの皆さんには学園祭に出店していただきました。それがきっかけで「第 2 回あみ大好き青空市」には、正式に「うら谷津・上長　ふるさと味の会」の名前で店を出すことができました。うら谷津への野道には農家の野菜直売所も生まれました。

市民農園など、うら谷津再生への市民の参加も広がり、定着してきています。市民農園参加の方々の畑は個性的で、それぞれ次第に風格が出てきたように感じられます。有機農業あり、自然農あり、やり方はいろいろですが、土との対話、作物との対話、そしてうら谷津との対話は、それぞれに深まっているように思えます。来年は日本蜜蜂へのチャレンジも始まるようです。

うら谷津再生委員会も中核的会員として加わっている「あみ自然再生ネットワーク」も活発に活動しています。11 月 25 日に開催された「第 2 回あみ大好き青空市」は昨年の第 1 回を上回る大成功に終わりました。たくさんの方々が

おいで下さり、買い物をし、おしゃべりをし、野市での楽しい時間をすごしておられました。これからの阿見町の望ましい姿をかいま見る思いがしました。

うら谷津再生の作法と考え方、つづめて言えば「うら谷津の思想」とでも言うべきものが次第に見えてきたのも今年の成果でした。

うら谷津再生は、人が事前に立てた計画に沿って進めるというやり方ではなく、うら谷津の存在を大切にし、うら谷津と対話しながら、進んでは立ち止まり、時には後戻りし、また少しずつ歩み出す、という形で進めてきました。計画性に欠けるかに見えるこうした取り組み方のなかから、私たちはうら谷津を知り、うら谷津との対話を会得し、うら谷津自身も少しずつ、時にはダイナミックに動き始めています。うら谷津再生とは、うら谷津自身の動きを感じ取り、その意味とあり方を考え、見えてきた動きを少しずつ誘導し、そして、うら谷津とともに私たちも変わっていくということなのでしょう。

活動のこうしたあり方が、「うら谷津再生の作法と考え方」であり、それは「うら谷津の思想」とでも言えるものだという気がしています。

うら谷津が甦り、それに導かれて人々が甦り、そして地域が甦る。この３つの「甦り」が、結び合い、交じり合いながらうら谷津の地で、新しい何かが生まれてくる。最初に述べたこのことが、うら谷津の地に自然な姿で定着し、語り継がれ、いつの日にかそれが「うら谷津甦り伝説」として語られるのかも知れません。

うら谷津再生第Ⅱ期のこれからを、「うら谷津の作法と考え方」、「うら谷津の思想」を大切にしながら手を携えて進めていきたいと思います。

2007年12月22日

うら谷津再生委員会副代表　茨城大学農学部教授　中島　紀一

うら谷津シンポジウム 2006
はじめのことば

うら谷津再生委員会副代表　茨城大学農学部教授　中島　紀一

2004年にスタートしたうら谷津再生活動は3年目を終えようとしています。

先の見通しはさておき、まずやれることから始めようとして、開始された再生活動でしたが、学生たちの頑張りと住民の方々の参画を得るなかでうら谷津再生の将来におおよその見通しを立てられるところまで来たように思います。試行錯誤の連続ではありましたが、楽しく、やりがいのある、そして発見の多い3年間でした。なによりも、私たちのささやかな働きかけのなかで、眠っていたうら谷津が、そしてうら谷津を囲む地域社会が、少しずつですが確実に動き出したことが嬉しいことでした。

再生活動としてわずかな面積ですが、復田が進み、野菜づくりなどのための畑耕作も始まりました。そこでの作物の生育はすばらしいものでした。うら谷津は私たちの耕作を歓迎し、受け入れてくれているようです。また、うら谷津という場所が、人びとの立ち入りを拒絶するような様相から、穏やかで、いのち織りなす集いの場へと姿を変え始め、ここを訪れる人びとも少しずつ増え、たいへん心地の良い、憩える場所となりつつあることもとても嬉しいことです。さらに再生活動のなかで、地域に新しい人の輪が紡がれ広がってきていることも、なにより嬉しいことです。地元実穀小学校の田植え、稲刈り、餅つきなどの体験行事も定着してきています。市民農園の活動も始まりました。地元地権者の方々の参加も少しずつ広がってきています。盆踊りへの参加などを通して地元上長集落の活性化にも多少の貢献は出来てきたように思います。地道に頑張ってきた学生たちは、地域のみなさんとのおつきあいの中で見違えるほど成長してきました。

地域の自然と農業についての新たな発見、認識の深まりも数多くありました。

阿見町の谷津田の現況についての全体像を明らかすることが出来ました。復田活動のなかで、谷津の森、集水堀などの概念が明確になり、谷津の森と谷津田とそれを繋ぐ集水堀というワンセットの地域構造の存在も明らかになりました。耕作放棄が、一面では自然回復過程であり、また土地の恵みの蓄積過程であることも、復田一年目のイネの生育の素晴らしさを通して強く教えられました。再生活動の働きかけの中で、うら谷津の植生が動き始めたことも大きな発見でした。うら谷津はうら谷津自身のいのちの営みとして再生されていくのだという再生活動についての基本的見方も確立することができました。春の野点会や秋の赤米花見会などのうら谷津での文化行事は、野の文化とはどんなものであるのかを私たちに教えてくれました。うら谷津再生活動は、優れた文化活動としても発展していく可能性をもっていることがよくわかりました。実穀小学校の子どもたちの参加も多くのことを教えてくれました。現代の子どもたちが、うら谷津の自然の中で伸びやかに遊び、ゆったりと時間をすごしていく様をみて、子どもの世界、子どもが自ら育つとはどんなことなのかを教えられました。また、子どもたちと、かつてうら谷津を大切に耕していた地域のお年寄りたちとの交わりも、地域における世代を超えた人の輪について、これからの

道筋を教えてくれるものでした。さらに、今年はうら谷津にうら太郎君もやってきました。うら谷津に馴染み、うら谷津の自然を恵みとして穏やかに日々を過ごし、成長していく彼の姿から身土不二という言葉の意味が見えてくるように思えます。

うら谷津再生活動が、あみ自然再生ネットワークの活動の広がりの中で取り組まれてきたことも幸いでした。阿見町にはうら谷津再生活動と同じような志による市民活動グループがほかにもいくつもあり、それが連携しながら新しい地域づくり、自然共生型地域づくりとして展開し始めています。一年間の準備活動を踏まえて今年1月にあみ自然再生ネットワークが結成され、11月26日には「あみ・大好き青空市」が、ネットワーク主催、阿見町と茨城大学農学部が後援するという形で開催され、大成功を納めました。この青空市で阿見町での自然共生型地域づくり活動は、阿見町における住民主体の地域づくり活動の本流として社会的に認知されるようになったと思います。

茨城大学農学部という視点で振り返ると、大学が地域とともに歩むというあり方が、うら谷津の学生たちの活動などを通して鮮明に示されていったように思います。この取り組みが一つの中核となって、現代 GP「自然共生型地域づくりの教育プログラム――都市周辺の荒廃農林地再生に向けた農学教育の新展開」がスタートし、農学部としての地域連携活動も本格化してきています。阿見町と茨城大学農学部の連携協定も順調に動き出しています。

うら谷津再生活動は、おおよそ以上のような経過を踏まえて、いよいよ準備、試行の段階、すなわち第Ⅰ期を終えて、地域住民の方々の参画による本格展開の段階、第Ⅱ期にさしかかろうとしています。今日のシンポジウムでは、学生たちによる多方面にわたっての取り組み報告をお聞きいただき、うら谷津再生活動第Ⅱ期のあり方について考えあえれば幸いです。うら谷津の田の神さま、山の神さまも私たちの活動を見守り、応援してくれることでしょう。

2004年2月8日
うら谷津再生・鍬おろしの会で

うら谷津再生への期待
ーーー再生活動のはじめにあたってーーー

中島　紀一
（うら谷津再生委員会副代表・茨城大学農学部教授）

うら谷津４ヘクタールの田んぼが拓かれたのはそれほど昔のことではないようです。江戸時代の終わり頃か、明治のはじめ頃でしょうか。上長の祖先の方々が、力を合わせて一鍬ずつ拓いていったのだと思われます。うら谷津の田んぼは上長の祖先がみんなで拓いた田んぼで、力を合わせた村人たちは拓いた田んぼをみんなで平等に分けたのでしょう。むらの方々の所有持ち分がほぼ同じなのはそれ故ではないかと思われます。田んぼを拓くのはたいへんな苦労であったことでしょう。しかし、それはきっと希望に満ちた苦労だったのだと思います。

うら谷津の田んぼは、年貢米のための田んぼではなかったような気がします。いわゆる「ほまち田」だったのではないかと言う気がします。うら谷津の田んぼは上長の農家の方々の暮らしを支えてきたのです。

こんな歴史があるからこそ、うら谷津の田んぼは耕されなくなってからも、開発・転用にさらされることなく昔のままの形で置かれたのでしょう。うら谷津の田んぼには、田んぼを拓き、田んぼを耕してきた祖先からの思いが残されているような気がします。上長の農家の方々はその思いを大切にしてきたのでしょう。

その後、上長にも住宅が増え、たくさんの方々が移住してこられました。いま、上長の農家の方々と新しい住民の方々が力を合わせて、もう一度うら谷津の田んぼをよみがえらせる取り組みに着手しようとしています。これは祖先の思いを継ごうとするものであり、今日ここに集まった人々は、新しいふるさとを創る草分けの人々となるのだと思います。うら谷津の再生を通じてここに新しいふるさとが築かれていくのだと思います。

阿見町にお世話になってきた茨城大学農学部のメンバーも、そのほかの市民たちも、上長のみなさんとともに、うら谷津再生の取り組みに汗を流し、知恵を出し合い、古くて新しい地域、古くて新しい田園、永遠の自然を創り出していきたいと希望しています。

今年を出発点として、一年一年を積み重ね、できれば十年くらいの計画で、取り組みを進めて行きたいものです。